
男性恐怖症の私

侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男性恐怖症の私

【Nコード】

N2117D

【作者名】

脩

【あらすじ】

男性恐怖症の主人公。ある日転校して来た女性恐怖症の彼に、いつの間にか恋をしてしまっていた。お互い異性が恐怖の対称にしか見れていない。しかしそれを克服しながら、惹かれ合っていく二人の、もどかしい純愛ストーリー。

1・転校生

これは男性恐怖症の私と、女性恐怖症の彼との・・・不器用な恋物語である。

・・・初めまして。私の名前は倉本咲夜。
えー名前の由来は、私が生まれた日に満月が出まして・・・って言うのは置いといて、私は今友達に囲まれ本を呼んでいます。

「ねっ、咲夜！今日転校生がこのクラスに来るんだって！」

「・・・ふん・・・」

「それでね、それでね！男の子で、結構カッコいいらしいの！！」

「・・・へえ・・・」

「それからね、それからね！関西から来たらしくて、関西方面の訛りが入ってるんだって！」

「・・・ほおん・・・」

「もう！咲夜はどんな子が気にならないの!？」

「あああ!!」

私を囲んではしゃいでいた四人の友達のうちの一人が、私の読んでいた本を取り上げ、高々と腕を掲げ、怖い顔をして私を睨みつけた。

本を奪い返そうとピョンピョンと飛び跳ね頑張ったが・・・何分背の低い私だ・・・。本を取り返す事を諦め、仕方なしに友達の会話に参加する事にした。

「・・・で？」

「だ〜か〜ら〜！」

「咲夜はどんな子が気にならないの?!」

カッと目を開き迫ってきた友達に私は若干体を引き、顎に指を当て、真剣に考えているかのように演出し、

「……ならないねえ」
と呟いた。

「何でっ!」
「ならないものはならないのよ」

「だから何で! 咲夜の男性きょう」わあ〜わあ〜わあ〜!!」……
何よ」

危ない危ない……危うく私の秘密がクラスの男子に知られると
ころだった。

……そう、何を隠そう私は男が大の苦手なのだ。……その理由
は……まあ、また後で話すとして……。

「余計な事言わないの!」

「え〜? 別にいいじゃん」

「そーそ。誰も聞いてないって……咲夜が男せ」わあ〜わあ〜わ
あ〜!」……なんて」

「……もお、どうしてダメなの?」

友達のその言葉に、私はピクリと反応を示し、体をカタカタと震
わせた。

「……男なんて……男なんて……男なんて……っ! ろくな
生き物じゃないのよ?!」

若干涙目になりながら訴えかける私に、友達四人が引いている。
……失礼な。

「何でそんなにダメなの?」

「そーよ? 咲夜はクールビューティだつて男子に人気だし……」

「風当たりもいいから女子にも人気なのに……」

「もったいない……」

「……全く……」

うんうんと頷き合う友達に、私は初めて殺意というものを覚えた。
しかし大切な友達だ。手は下さないでおこう……。うん、偉いな!
私。

……と、まあそれはいいとして……。ここまで来たから私が男

性恐怖症になってしまった訳を話しましょう。私が男が大の苦手になったのには、二つの訳がある。

まず一つ・・・それは私の兄と、弟に問題がある！

私には兄が二人いて、そのうちの一人は超がつくほどの遊び人で・・・毎日毎日毎日毎日、違う女の人を連れて帰ってくる。それを私が自粛したらと言えば・・・、

「あっちから寄って来るんだよ？・・・何、咲ちゃんヤキモチ？」などとっ・・・ニヤニヤしながら迫ってくるのよ・・・っ！

アンタは本当に女の気持ちを考えた事があるのかと言いたいわ！

・・・そして二人目の兄は硬派で、清純派なのに・・・なのに・・・なのに、なのにっ！

酒が入ると超変態に早変わりしちゃうのよ！！

何度寝込みを襲われかけたか・・・っ！・・・ああ・・・涙が出てきた・・・。

そして、そして・・・唯一の弟は・・・極度のシスコン・・・抱きついてくるのは日常茶飯事。そして時には、キスをしようと迫ってきたり・・・寝こみを襲われそうになったりと・・・っ！ああ・・・本当に泣きたい・・・。

どうやら私の家系はみんな顔がいいらしく、さつき友達が言ったように私は『クールビューティ』・・・らしい。自覚はないし、したくもないしね。

・・・という風に、黙ってれば顔がいいって理由で兄達に寄ってくる方も寄ってくる方だけど、それでもっ！私は・・・男が怖くなっってしまった・・・。

でも、まだその時はいい方だった。私が・・・私を決定的な男性恐怖症にしたのは・・・中学2年生の時に付き合った、彼氏のせいだった。

男が怖かった、けど・・・恋をしてしまった・・・。

好きだよと言ってくれた声に、照れたように笑う顔に、優しく触れる手に・・・あの人の全てに、心を奪われた。

なのに・・・なのにつ・・・あの人には既に恋人がいて、私との関係がばれると、私がしつこく告白してきたから、仕方なく付き合っていたと言った。

あの人から告白してくれて、嬉しくて、泣きそうな位嬉しくて・・・どうしようもなかったのに・・・。

それは簡単すぎるほど簡単に・・・崩れ去ってしまった。

あの日以来、私は男が怖い。

告白してくれる男の人の人為が掴めない。

真剣に告白してくれていると分かっている。

・・・でも・・・その言葉も今だけでしょ？どうせアナタも、私を置いて、どこかにいってしまっただけでしょ・・・？

そんな思いが頭を離れない。

「・・・っ」

ああ・・・ダメだ・・・。あの時の思いが、フラッシュバックしてしまっ・・・。

・・・カタリと、肩が震えた。

「・・・咲？」

怖い・・・怖い怖い怖い怖い・・・っ！

「咲？咲！咲！」

男が・・・怖い・・・。

「咲夜！！」

「・・・。。え・・・？」

耳にダイレクトに響いた声に、私はワンテンポ遅れて反応した。

緩慢な動きで顔を上げると、ほっとした表情の友達が目に入った。

「大丈夫？」

「え・・・？あ、うん・・・」

私は・・・また・・・。

「・・・ゴメンね？聞かれない事も・・・あるよね」

「うん、ゴメンね。もう聞かないから」

「と言っても、何かあったら・・・なんでも言っただけ？」

「相談くらはいは・・・乗れるでしょ？」

「・・・みんな・・・」

私は大きく目を瞠った。何も聞かずに包み込んでくれる友達に、涙が出そうだった。

ありがとう、ありがとう・・・そうつぶ言のように呟く私を抱き締め、友達は笑顔を見せてくれた。

「・・・ん？ちよつと待てよ・・・？」

「・・・ねえ」

「ん？」

「私の隣・・・空いてるよね？」

「うん。そうだね」

「今日、転校生来るんだよね？」

「うん。おまけにイケメン！」

「いや・・・それは死語でしょ？」

「そんな事ないって！まだまだいけるよ?!」

「あ・・・うん・・・そう・・・って違って!という事は私の隣？

!」

「「「「・・・あ・・・」」」」

「いつ・・・いやあああああ!!!!」

私の席は窓側の二列目の席で、一番後ろ。クラスの人数が合わないからと、私の左隣は居なく、右隣は女の子で、前の席も女の子。・・・まあ、周辺に男子がいるのは無視して、こんないい席はないと思っていたのにつ・・・よりによって隣におっ・・・男が来るなんてっ!

「まあまあ・・・多分大丈夫だつて!!」

「そうそう!咲なら何とかなるつて!!」

「こつちからしてみたら羨ましいけど」

「そう思っなら代わってくれえええええ!!」

私がクールビューティとの代名詞を捨ててまで叫んでいるのに、何て薄情な子達なの!あ、チャイムが鳴っちゃった。それじゃーね、

頑張つてね〜！・・・などとぬかしながら自分の席に戻って行つてしまつた！

あああ！待つてっ、マイフレンド！そしてもう来やがったのかっ、クソ担任！！

っち！不貞寝してやる！！

・・・うるさいなあ。どうやら本当に数分だけだけど眠つてしまつていたらしい。

ゆっくりと体を起こすと、教卓に先生と・・・誰？何かへらへらしっている奴が立っているのが見えた。

・・・ああ、転校生か・・・。ま、どうでもいいけど。・・・もう一眠りするか・・・。

私がそう思い、再び机に突っ伏しようとした丁度その時、

「えーつと・・・席はあそこで寝てる奴の隣、あの席でお願いね」との声が聞こえて来た。

そしてコツコツと革靴の音・・・次第に足音は近くなり、私の隣で止まり、椅子が引かれる音がした。

「倉本！当分教科書もないだろうから見せてやってくれな！」

「！！？」

その言葉に私は勢い良く体を起こし、大きく目を開き先生を凝視した。するとあんのクソジジイはハハハと笑いながら、仲良くな！と言ひ残し、教師を出て行つた。

ちよっ！待てよ！私は男なんかと・・・っ！

「えーつと・・・」

「え？！」

聞こえて来た声に顔を横に向けると、転校生がこっちを見て、苦笑を浮べていた。

ドクリと、心臓が嫌に軋んだ。背中にブワツと汗が噴出し、体が小刻みに、誰にもばれてはいないだろうが、震えてきた。

怖い・・・。

「さつき自己紹介するとき、寝とつたやろ？俺の名前は二ノ宮雅明・
・よろしゅうな？」

「!?!」

笑顔を見せながら告げられた彼の名前に・・・私は息を呑んだ。

だって・・・だってまさか、私を男性恐怖症に追い込んだあの人と・
・同じ名前だなんて、夢にも・・・思わなかったから・・・。

「あ・・・えつと・・・」

言葉が上手く出てこない・・・こっちを見られて、一層恐縮して
しまう。

恐怖で体が縮み込む。・・・でも、私はこのまま、男が苦手
なままでいたくない。少しでもいいから・・・克服したい。そして・
・もう一度恋をしたい。

その思いが、私を動かした。

「私は、倉本咲夜、です。えと・・・よろしくね？」

小さく、強張っていたかもしれないけど、笑顔を向けてみた。す
ると二ノ宮・・・君は何故か大きく目を睨った。・・・と思ったら
また笑顔を見せて、よろしゅうなと言った。

・・・なんだろ？

少し・・・二ノ宮君の笑顔に違和感を感じる。

・・・ま、気のせいでしょ！

自分の中で勝手に納得させて、私は机の中から本を取り出し、読み
出した。そろそろクラス中の女子に二ノ宮君の席が囲まれるんだろ
うな・・・と、人事に思いながら。

って言っても本当に人事だし？気にしない、気にしない。

これが、彼と私との不器用な恋の始まりでした。

1・転校生（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

誤字脱字、感想、意見等々・・・是非とも仰って下さい。

これからもよろしくお願い致します。

2・気付いてしまった、友達の恋心

・・・今日もキヤーキヤーと、女の子の黄色い声が絶えない教室。彼が転校してくる前も煩かったけど、彼が転校してきて一層煩くなつた。

そう・・・一週間前に転校して来た、二ノ宮雅明君のせいで。

私の隣の席になった彼に教科書を見せてあげたりしたのは、最初の数日だけ。その間は少しは会話を交わしたし、笑顔も見せた・・・と思う。

自分でも珍しいと思う。でもその理由はきっと・・・彼が私と似た、何かを持っているからだろう。

「さくく！」

「・・・ん？」

二ノ宮君の隣の席は煩いから、私は最近休み時間の度に、自分の席から遠く離れた友達の席に入り浸っていた。そんな私に、今も友達の綾香は不満そうに頬を膨らませている。

なぜなら・・・、

「ね〜二ノ宮君のところにいてよぉ〜！咲夜がいてくれたら二ノ宮君の側にいれるじゃん〜」

彼女は二ノ宮君の事が好きだから。

「ん〜・・・そうねえ〜」

「ね！お願いい〜さくう〜」

ミーハーな彼女はコロコロと好きな人が変わる。

・・・友達にこんな事言いたくないけど・・・彼氏がいても続かないのは、彼女の飽きっぽい性格のせいだと思う。

だからこそ・・・二宮君の事を本当に好きなのか・・・はつきりしない。だから、協力してあげたいと・・・思えない。ごめんね、綾

香！

でも・・・、

「ねえくさくうくお願い！」

女の子には弱いのだよ！！ちくしょおく！なんてフェミニストな私っ！今は憎いこの性分！！

腕を引つ張られ、私は渋々と立ち上がり、自分の席に着いた。

二ノ宮君の隣には大島君がいて、私が席につくとにこつと笑ってきた。・・・ああ、爽やかな笑顔です事・・・私には寒気しか与えないけど。

「ね、倉本さん」

「・・・何？」

少しぶつきらぼうに答えすぎたかな？そう思い大島君に視線を向けるが、気にした様子もなくニコニコと笑っている。そんな彼の口から驚くべき言葉が発せられるのは・・・あと少し。

「俺たち土曜日に遊ぶ事になったんだけど・・・倉本さんたちも来ない？」

「・・・は?!」

・・・え?!は?!何それ?!・・・ってか、二ノ宮君聞いてなかったんじゃないの?めっちゃビックリした顔してますけど・・・

「あ、いいねく！あたし達も土曜日遊ぶつもりだったんだく！」

「え?!」
そして何を言ってるんだ！マイフレンド!!そんなの聞いてないよ!?!あ、ほら。二ノ宮君も驚いてるじゃん!!って勝手に話を進めるなあああああああ!!

表面には出さずに私が心の中で葛藤を繰り返している内に・・・土曜日に私・綾香・大島君・二ノ宮君で遊ぶ事は決定していた・・・

「・・・マジでか・・・」

「楽しみね！咲夜VV」

・・・友達がこれほどまでに憎いと思った事は・・・あ、以前にもあったか。・・・まあいいけど・・・それよりそれほどまでに二

ノ宮君に近付きたいの?!

あゝもお本当に、土曜日を思うと気が重いよおおおおおお!!
そして私こんなキャラだっけ!? 最近可笑しいよ、自分!

「アハハハ、咲夜変な顔」

「誰のせいよ!」

気付いてしまった、友人の想い人。

これが後々……私を苦しめると、今の私は夢にも思っていないかった。

2・気付いてしまった、友達の恋心（後書き）

今回も長々と読んでいただき、ありがとうございました。

前回同様、感想・意見・アドバイス等々・・・ありましたら是非とも仰って下さい。

これからよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2117d/>

男性恐怖症の私

2010年10月30日21時19分発行